

B年特定18 マルコ7章31―37節

〔直訳〕

- 31 そして 再び 出て テイルスの地方から  
彼は来た シドンを通って  
ガリラヤの海へ デカポリス地方の間を。  
32 そして 人々は連れて来る 彼に 耳の遠い そして 舌の回らない者を  
そして 彼らは頼む 彼に 彼が置くようにと 彼に 手を。

- 33 そして わきに連れて行き 彼を 群衆から 彼だけで  
彼は投げた 彼の指を 彼の耳の中へ  
そして 唾を吐いて  
彼は触れた 彼の舌に、  
34 そして 見上げて 天の中へ  
彼は息を吐いた  
そして 彼は言う 彼に、  
「エッフアタ」、これは ある、 「あなたは開かれよ」で。

- 35 そして 「すぐに」 開かれた 彼の聴力が、  
そして 解かれた 彼の舌の束縛が  
そして 彼は話していた 正確に。

- 36 そして 彼は命じた 彼らに 誰にも彼らが言わないようにと。  
だが彼らに 彼が命じていたほどに、  
彼らは ますます いっそう 言い広めていた。  
37 そして この上もなく 彼らは驚嘆していた 言いつつ、  
「よく すべてを 彼は行った、  
そして 耳の遠い者たちが 彼は行く 聞こえるように  
そして 口のきけない者たちが 話すように。」

〔新共同訳〕

- 31 それからまた、イエスはティルスの地方を去り、シドンを経てデカポリス地方を通り抜け、ガリラヤ湖へやって来られた。 32 人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その上手を置いてくださるようにと願った。 33 そこで、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。 34 そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、「エッフアタ」と言われた。これは、「開け」という意味である。 35 すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができるようになった。 36 イエスは人々に、だれにもこのことを話してはいけない、と口止めをされた。しかし、イエスが口止めをされればされるほど、人々はかえってますます言い広めた。 37 そして、すっかり驚いて言った。「この方のなさったことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてくださる。」

①構成

③ 31—32節

31節は32節以下を30節以前と結び合わせるための編集句だろう。24—30節では、ティルスの方へイエスは行き、シリア・フェニキアの女性の願いを聞き、彼女の娘から悪霊を追い出す。32節の動詞は「連れて来る」も「頼む」も三人称複数形である。不特定の人々が、耳の遠い、舌の回らない者(単数形)をイエスのもとに「連れて来て」、手を置くようにと「頼む」。

④ 33—34節

イエスの動作が細かく描写されるが、最後の「言う」を除いて、分詞形と定動詞の組み合わせであり、「わきに連れて行き、指を投げた(入れた)」、「唾を吐いて、触れた」、「天を見上げて、息を吐いた」と述べている。最後の「言う」だけが、この組み合わせを崩しているのは、ここに強調があるからだろう。イエスを霊能者から区別するしるしが、呪文ではなく、エツファタと「言った」ことに示されている。

⑤ 35節

この節の三行目で、癒しを受けた「彼」が初めて主語となる。「彼の聴力が開かれ」、「彼の舌の束縛が解かれ」、「彼は正確に話していた」。「彼」が自ら行う動作はこれだけであり、癒される前の動作は描かれていない。

⑥ 36—37節

再び人々の動作に焦点があてられる。彼らは禁じられても出来事を「言い広め」、「すべてを彼はよく行った」と驚く。ここでの「耳の遠い者」や「口のきけない者」は複数形である。32節と違って複数形に変えられたのは、もはや個人に起きた例外的な出来事ではなく、神の国の到来を示す出来事だからである。

⑦ 人々の行動 (31—32節)

① ティルスやシドンは地中海沿岸の町であるからガリラヤ湖の西側になり、デカポリスはガリラヤ湖の東側に位置するので、31節が描く移動経路は不自然である。しかし、マルコ1章が描いていたように、ガリラヤ湖西岸のほぼ北端の町カファルナウムがイエスの宣教拠点になっていたこと、さらにティルスやシドンを、そしてデカポリスが異邦の地であることに注目すれば、西と東の異邦の地を訪ねたイエスが再び宣教拠点に戻ったことを強調しようとしたのかもしれない。マルコによると、イエスの宣教はガリラヤを主要舞台としているが、異邦の地に無関心ではない。

② 異邦の地を離れてガリラヤ湖へ戻って来たイエスのもとに、「耳の遠い、舌の回らない者」を人々が連れて来る。病人が自分で来たのではなく、人々が連れて来ている。奇跡を準備したのは、本人の信仰ではなく、人々の信仰である。人々はイエスが「手を置く」ことを願う。それは「祝福」であると同時に「解放のしるし」である。ここではイエスがそのようにしたとは書かれていないが、イエスはしばしばこの動作によって病気を癒している(ルカ13:13、マコ8:23)。

⑧ イエスの反応 (33—34節)

① 癒しの奇跡の描写には大きく三つの要素、①病状の描写(32節)、②治癒のための所作(33—34節)、③治癒の確証(35—37節)が含まれている。この段落は②に当たり、人々の行動に応じたイエスの動作が細かく描写される。イエスは「耳の遠い、舌の回らない者」をわきに連れて行き、

指を耳に入れ、唾を吐いて舐れ、息を吐き、「エツファタ」と言う。これらの動作のほとんどは、癒しの奇跡を行う霊能者であれば、誰でも行う動作だと言える。

⑥しかし、イエスに特徴的な動作もある。当時の霊能者は意味不明の魔術的な呪文を唱えて奇跡を起こそうとしたが、イエスは意味の明瞭な言葉を用いている。呪文であれば、意味の不明さが重要な要素であるのだろうが、「エツファタ」はごく普通に用いられるアラマイ語である。マルコがこれをギリシア語に訳したのは、単純にアラマイ語だからであり、ギリシア語の読者に配慮したからである。イエスの奇跡は魔術なのではない。イエスが神の支配を運んでいることの「しるし」となる出来事である。だから、イエスは呪文ではなく、誰もが話す言葉で奇跡を起こす。

⑦「天の中へ見上げて、息を吐いた」は、霊能者であれば、精神統一のための動作である。しかし、イエスの取ったこの動作にも特別な意味がある。天を見上げるのは奇跡の前の精神的な高揚のためではなく、静かに神に祈るためである。五千人に食べ物を与える出来事の際にも、イエスは「天を仰いで」賛美の祈りを唱える(六41)。

⑧「息を吐く」はステナゾーであるが、この語には「ため息をつく・嘆息する」のほかに、「うめく」という意味がある。「息を吐く」が奇跡執行者の動作として描かれているのであれば、いやしの力がイエスの内から外へと発揮される様子を表している。しかし、イエスの癒しが魔術ではなく、神の救いの力の現れであることを考えるなら、「うめく」という意味を考えることができる。つまり、病を自分ではどうすることもできない人間のために、「うめいて」執り成すイエスの姿がこの語で表されている。

⑨ステナゾーはローマの信徒への手紙8章では、すでに始まった神による救いと、まだ残っている苦しみが共存する終末的な現在を生きる人間を表す語として使われている。被造物は「共にうめき」(22節・シユンステナゾー)、霊の初穂をいただいている私たちも、神の子とされることを心の中で「うめきながら」(23節・ステナゾー)待ち望んでいる。そして、霊は言葉に表せない「うめき」(26節・ステナゾーの名詞形ステナグモス)をもって私たちのために執り成している。パウロはこの語を使って、キリスト者がすぐに手にする栄光に比べれば取るに足りない今の「うめき」を表す。パウロの「うめき」は強くなれば強くなるほど、希望を深めるうめきである。

⑩イエスは霊能者の仕事として「息を吐いた」のではない。むしろイエスのうめきは、言葉にならないうめきであり、人間のために執り成す「霊」のうめきである。イエスの吐く息は、全被造物の苦しみを自分のこととして引き受け、そこからの解放を願ううめきである。

#### ④癒しの出来事 (35節)

①この段落は三つの文章からなり、最初の二つの主語は「聴力」と「束縛」である。ここで「束縛」が用いられているのは、イエスの奇跡が神の支配による「あらゆる束縛からの解放」を示すしるしだからである。

②「舌」と直訳したグロツサは、単純に身体の部位を指す例もあるが(ルカ一六24)、ほとんどは人間の言語活動に関係して使われ、言葉を話す人間のあり様を表すこともある。33・35節では、「舌」は言葉を話すための器官である。35節の「舌の束縛」は悪霊によって舌が縛られていることを暗示する表現なので、舌が解かれたことは言語能力の単なる回復ではなく、悪の力に対するイエスと神の勝利を意味している。

③三番目の文章で初めて「彼」自身が主語となる。彼を癒すのはイエスが運ぶ神の支配であり、彼

をイエスのもとに運んだ人々の信仰である。彼は癒しを受けるまではまったく受け身である。癒されて初めて、彼が自分で「話す」。これは癒されたことを証す動作であると共に、束縛から解放された者の喜びを表している。

### ⑤ 人々の反応 (36―37節)

④ この段落では再び人々の動作に焦点が当てられる。彼らは禁じられれば禁じられるほど、出来事を言い広め、「すべてを彼はよく行った」と驚く。「よく行った」は、創世記1章の「それは極めて良かった」を思い起こさせる。神の創造の業はイエスによって継続されている。神はイエスを通して世界を新たに創造し、救いを成就しようとしている。

⑤ イエスは奇跡について語ることを禁じている (一44、五43)。「誰にも言わないように」という禁止命令は、イエスの本当の姿は十字架と復活によってのみ明らかになるというマルコの主題を支えている。しかし、イエスが禁じれば禁じるほど、人々はイエスの奇跡を言い広めていく。36節の直訳2行目の「命じていた」は未完了過去形であるが、これは繰り返し「命じた」の意味か、あるいは「命じたが失敗した」という意味である。

⑥ 36節の直訳3行目の「言い広めていた」も未完了過去形である。これは動作の反復・継続を意味するだろう。「言い広める」と直訳した語はケリーリュツソーである。この語は新約聖書では、神の救いの業・福音を「宣べ伝える」の意味で使われることがほとんどであるが (一14、一三10、一四9)、ここでは「一般的な知らせを大声で布告する」の意味で用いられている。

### ⑥ 誰にも言わないように

⑦ この奇跡物語では「耳の遠い、舌の回らない者」その人ではなく、彼をイエスのもとに連れて行く人々が癒しを願う。その人々の信仰に応えて、イエスが動く。そして、癒しの奇跡の後に「驚いて、言い広める」のも、癒された本人ではなく、癒しを求めて信仰を示した人々である。神の業を目の当たりにした人々は、「誰にも言わないように」とイエスから命じられるが、イエスの言葉に聞き従うことをせず、奇跡の業を言い広め続ける。イエスと人々は共に癒しを願っていたが、奇跡の後には、人々はイエスの思いから離れていく。イエスが奇跡を行えば、イエスに対する賞賛はますます大きくなり、イエスのうめきと深い思いは人々には見えなくなる。

⑧ 人々は「イエスはよく行った」と言って、イエスが神の業を行ったことを称え、「耳の遠い者たちが聞こえ、口のきけない者たちが話すように」したと言って驚く。確かに、イエスは見えない神の力を現すことのできる方である。しかし、イエスが神の力を現すことができるのは、神の思いに従う者だからである。そのことに人々は気づいていない。人々が見るべきなのは、十字架に上るイエス、復活の命を生きるイエスである。その時が来るまで、イエスは「誰にも言わないように」と命じる。人々が驚くべき出来事にだけ目を向け、イエスを単なる奇跡行為者と見ることはないためである。

⑨ 「耳の遠い、舌の回らない者」とは、救いを求めて「うめく」者の姿でもある。このうめきに合わせてイエスもうめいて、深く息を吐き、その苦悩を自分のこととして共に担う。その姿は十字架に上るイエスを暗示している。イエスのうめきは苦しみを神に執り成す祈りであり、このうめきが奇跡を引き起こす。イエスが告げる「エツファタ」は、うめきからの救いを待ち望む者への励ましであり、束縛からの解放を告げ知らせる力強い宣言である。